
カラス屋

白猫@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラス屋

【Nコード】

N5343L

【作者名】

白猫@

【あらすじ】

自らの魔法を駆使し、様々な依頼をこなす依頼屋カラス屋。その所長であるカラスは、今日も相棒兼悩みの種であるサクラと共に様々な依頼をこなすのであった。

カラス屋 壱

彼は今悩んでいた。古びた事務所の一角にある古びたソファーに、だらしなく手足を伸ばし、『月刊リーサルウエポン』という名前が付いているにもかかわらず、今年で創刊三十周年を迎えた雑誌を顔に被せ、毛布にくるまり、寝ている格好で低い唸り声を上げながら悩んでいた。

彼を悩ませている種は、ソファーの横に置いてある縦長のテーブルと、そこからちよつと離れたところに置いてある彼専用のデスクにぶちまけてある依頼書、この依頼書――、正確にはこの依頼を取ってくる彼の相棒が彼の悩みの種だった。

ぶちまけられたいる依頼書には、とある夫人からのペット探しの以来や、新人アイドルが受けているストーカーの調査、ホスト通いの女からの夫の浮気調査等々、一見身近そうで身近ではない依頼から、突如物資の物流ルートに現れたバグの除去から、名前を聞くだけで怪しい会社や組織の調査、新型警備ロボとの模擬戦闘、はたまた頭が狂った金持ちが捕まえてきた大型バグとの、シヨーという名の殺し合いの依頼まであった。

ソファーに寝転んでいる彼みたいな『依頼屋』は、そう言ったペツト探しというごくごく平凡な依頼や、バグと呼ばれる特定の形状を持たない様々な害をもたらす生物の排除、奇妙奇天烈な金持ちの道楽に付き合うことで依頼金を手にし、生活をしている。そして彼の悩みというのはそんな依頼に対してのものだった。

彼はパサリと顔に乗せていた雑誌を手で払い、依頼書の山に手を伸ばすと、その中の一枚を無造作に抜き取った。

雑誌がどかれて見せた彼の顔は、キリリとしたつり目が特徴的な、おおよそ二十代前半の若者だ。しかし彼はそんな夢溢れる年代とは似合わない難しい顔をし、そのあと思い切りため息をつく。

「また勝手に受けやがって……」

彼の見ていた依頼書には、複数の大型バグの排除の願いと、その依頼者の名前、住所等の必要事項の他に『受諾依頼屋カラス屋』という新たに書きたされた文字があった。

依頼書には、依頼屋がその依頼を受けると、自動的に受けた依頼屋の名前が、その依頼書に付加された魔法によって書き足される仕組みになっている。

そしてテーブルやデスクにぶちまけられている依頼書の一つ一つには、彼の事務所名であるカラス屋という名前が書かれてあった。

「こんなことしたら、また上から目エつけられんだろうが」

依頼屋というのにはランクがあり、一番下のCからA、そして世界中で数えるくらいしかないブランドまであり、下は上に羽振りのいい仕事を譲らなければならないという暗黙のルールである。

彼が所長を務めるここカラス屋のランクはB、よって今回のような羽振りのいい仕事は上に譲らなければならない。だが彼が言っていたあいつはそのような配慮を一切しない。そのおかげで数々の依頼屋から、脅迫状じみた手紙が送られてきたり、下っ端連中を刺客として送り込まれ、そして彼は一々その相手をしなくてはならない。

彼がもう一発ため息をつこうとしたら、派手な音とともに吹き飛ばされた玄関のドアが彼の目に映った。ドアは彼の目の前まで吹き飛ばされ、そして彼が寝ているソファアの横を通り過ぎ、彼のデスクを巻き込み、停止した。

それと同時に複数の足音が聞こえ、彼の事務所に入り込んできた。依頼屋どうしでありがちな殴りこみだ。そしてアツと言う間に、ソファアの周りにぐるりと円になるようそれぞれ武器を手にした覆面達に囲まれてしまった。

（待っていたのバレバレだっつーの。どんだけ俺を消したいんだよ）

彼がまるでタイミングを見計らったような殴りこみにため息をついた。

「お前がカラスか？」

目鼻だけがしっかり空けられている覆面がそうだった。声色からして女だろうか、そういうとその女は手に持っていた剣を彼ののど元に突き刺す。

「だつたら？」

「依頼を取り消せ。さもなくば……」

「そういったことは、俺じゃなくあいつに言ってくれ」

「私たちがあんな化け物に勝てるわけないだろ？ さっきその依頼を取り行った仲間がやられたしな。だつたら少しでも勝機がありそうな貴様にこうしてお願いしてるだろ？」

「勝てるわけないだの、勝機だの……、お宅ら物騒だね」

「これがアタシたちのやり方だ。分かったら取り消して貰おうか」
「ハア……、と長い溜息を付き、上半身だけ起き上がる。先ほどもカラスののど元に剣を突き刺していた女は一步退き、他の者達も各々の武器を構える。」

「そんな事よりも、ドアとテーブルの修理代はどうするんだ？」

「貴様ツ……！ アタシ達を馬鹿にするか！！」

カラスが肩をすくませ、そんな場をわきまえない女はいらだち、先ほどまで突き付けていた剣でカラスの首を刎ねようとする。

「おつと……」

カラスはそれを相手の手首を持つ形で受け止めると、女の手首を捻り、そのまま折り曲げた。

「ギヤアアアアア！！」

女が断末魔を上げ、武器を落とし、肘をつける。

女の手首を曲げたカラスは立ち上がった。自分の腰に巻いてあったホルスターから、右手で銃身の長い銃を取り出すと自身の魔力を右手に集中させる。

『発砲準備完了。残り弾数三十』

そんな機械音が、カラス脳内に直接行き渡る。

彼の武器『スピーク・バレル』は、自分の魔力で銃弾を具現化させ、それを手動で詰め、撃つという従来の銃とは違い、魔力を直接

銃に送り込むことによって、それを銃が自動で行い、残り弾数を常時教えてくれるシステムをそなえた銃の事で、彼の物はそれに改造をくわえた特別製の物になっている。ちなみに名前は『アイ』である。

カラスはアイを使い、手首を折った女と同じような服装をした二人に一発ずつ発砲する。一発は右肩を貫通し、もう一発は左のをもを貫通した。そして先ほどの女と同じような叫び声を上げた。

『残り二十八発です』

アイの機械音がそう告げる

「てめエら何やってんだ！！さっさと片付けろ！」

手首を折られた女の一声で、取り囲んでいた者達が我に返り、撃たれた二人と、仲間連中に罵声を浴びせた女も左手に剣を持ち立ち上がった。そして各々の武器を振りかざし、カラスに襲いかかる。

（敵は八人か）

カラスはまず一番初めに真正面から襲ってきた者に、二発の弾を浴びせる。肩と腹それぞれに命中し、血を噴き出しながら前向きに倒れる。

『残り二十六発です』

そして右に振り向き、そこにいた者に対し発砲、右にいた槍の先端がカラスの首まであと少しだった者の腹に命中。それが倒れるのを確認せずに、魔力を腰から足のつま先を中心に体中にめぐらせ、後ろから剣を振りかざしてきた者に対し、回し蹴りを放つ。

『残り二十五発です』

「ゲッ……、オウエエエエエエ！」

アイの機械音が聞こえたのと同時に、鳩尾に回し蹴りを受けた者が吹き飛んだのはほぼ同時だった。吹き飛ばされたものは、ソファーを巻き込み壁に激突。辛うじて立ち上がるものの、耐えきれなくなり、その場で嘔吐する。

（全員女か？それよりもカーペット汚すなよ……）

そんな事を考えていると一発の銃声が響いた。先ほどカラスに左

のもを撃たれた者が、自らの銃の引き金を引いていたのだ。弾は真つすぐカラスの心臓を貫こうとしていた。しかしカラスの周りに張り巡らせたマギがそれを許さず、彼の魔力が銃弾を受け止めた。

「へえ……、俺のとは違うタイプの銃なんだ」

カラスがそう言つと、受け止めた銃弾に何重にも自分の魔力を固める。

「ハアアアアア!!」

「イヤアアアア!!」

カラスが自分のマギを込めているすきを狙い、右から剣、左からも少々小振りの剣が襲いかかる。

「ほいつと」

カラスはそれを仰向けに寝転ぶようにしてかわし、右手に持つアイを襲いかかってきた二人に向ける。二人の目にカラスの表情が写る。とてもつまらなさそうなそんな顔をしていた。

右肩と左肩に弾を撃ち込み、襲いかかってきた二人を倒す。それと同時に受け止めていた銃弾を元の持ち主へ返す。何重にも絡ませた自らの魔力を添えて。

「ゲッ……」

返された弾は持ち主だった覆面の鳩尾に返される。何重にも絡ませた魔力のせいで、腹に空洞が開かずにすんだが、魔力のせいで後ろに跳ね飛ばされる。

『残り二十四発デス』

「さてと……」

辺りを見回すと、生きているかどうか分からないほど出血している者から、腹を抱えてうずくまっている者まで、合計六人床に倒れている。

「どうする？」

カラスがそういうとアイを発砲した。弾はそのまま立っていた二人の打ち一人、先ほどカラスの銃弾が右肩を貫いた者に命中し、腹から血を吹き出し、叫び声を上げながら倒れる。

「クッ……」

残ったのは最初にカラスに剣を突き付けてきた女ただ一人になった。

女は辺りを見渡すが、誰一人として立っている者はいない。

「安心しろ、ここで殺すと面倒くさいから一応殺してはない」

倒れている者をよく見てみると、血こそ出ているが全員うめき声すら出さずに眠っていた。

「俺特製の銃のおかげで今はぐっすり寝ているよ。銃弾に込めた俺の魔力のおかげで、起きる頃には傷も塞がってる」

カラスはそのあと「あー……、でもマズイかもな」と言いアイをホルスターにしまう。

「お前がさつき化け物と言ってた奴が、今お前の後ろに立ってるぜ」

それを聞いた瞬間その女は、瞬く間に顔が青ざめ、冷や汗が噴き出し、手足が震え始め、左手に持っていた武器を落とした。

「ヨオ、どつかの誰かさんよ。うちの事務所をこんなにしちまったのは、あんたの仕業かい？」

低くドスの利いた女の声が部屋に響き渡る。女はポンポンと震えている女の両肩に後ろから手を乗せ、その手に力を込める。

「いぎっ……！」

メシメシと女の肩がなる。そしてそのままさらに力を込める。

「ガッ……！グアッ……、アアアアアアアアアアア！」

バキッと部屋中に骨が折れる嫌な音が響く。骨を折られた女は肩を押さえ、うずくまる。

「ったく……、ここのセキュリティはどうなってんだ？」

「約一名による三食昼寝付きのぐうたらなセキュリティってどこかな」

カラスは肩をすくめる。その目に映るのは、東洋に古くから伝わる製法で作られた魔力を防ぐ法具『着物』を羽織り、褐色の肌を持つカラスの相棒兼悩みの種の獣人『サクラ』だ。

カラス屋 二

「まーた変な奴らを事務所内に入れやがって……、こりやまた引越しか？」

「そういうことになるかな……、それとこれは俺のせいじゃない。こいつと……こいつと……」

そういうとカラスは一人一人の覆面を取っていく。

「こいつらだ。まあ、大体予想はついていたけどな」

「へえ……、こいつはめずらしいね」

サクラが物珍しそうな顔をし、カラスがため息をついた。その理由は目の前に倒れているカラスを襲った者たち全員が女だからである。

「女達だけで襲ってきたのか、男がいないところを見ると『アマゾネス』の連中か」

「アマゾネス……、ああ、あの女しか雇わない確か…… Aランクの依頼屋か。すごいなカラス、お前日からやばいぞ」

「まったくくだな。原因はお前だが、しわ寄せは全部俺に来るもん。でも今回も引越するから当面は大丈夫だな」

さてと、とカラスが一息つくと、潰れた自分専用デスクから車のカギと、床一面に散乱している依頼書の中から今回の依頼書を取り出すとドアのない玄関に向かった。

「おい！こいつらはどうすんだ？」

サクラがカラスを襲ってきた女達を指差す。サクラに肩をつぶされた女の体は震えていた。

「これ以上そいつらに手を出したら、アマゾネスから死ぬまで俺もお前も狙われるハメになるぞ」

「……、それもそうか、確かにそれは面倒くさいな」

さっさと階段を降りて、自分の車のあるところに向かおうとするカラスをサクラが追いかける。

しばらくすると車のエンジンがかかる音が響き、車が出て行くのがわかった。

カラス屋少女と会うー

「ハア…ハア…ハア……」

昼の太陽が照りつける荒野の中、少女が白い長そでの服を羽織り、ただ一人なんの荷物も無しで歩いている。太陽に照らされ、フードの中から見せる白い顔には、玉のように大きな汗を大量に掻いており、手足はフラフラ、目も焦点が定まっておらず、今すぐにも倒れてしまいそうだった。

（あー……、やっぱり維持でも荷物取り返しておけばよかったかな……？）

彼女がこうなったのは三日前に山賊に襲われたからだ。しかも二人や三人ではなく、十人単位で来られたから性質が悪い。なんとか逃げ切り、荷物だけが取られただけでよかったものの、今では少し荒っぽい事をしてでも取り返せば……、とそんな後悔すらしている。（三日も歩けば着くって言われたし、どうせ町に着いたら適当に仕事して稼いだお金で、新しいバックとか食料とか買えばいいやつて思ったのが間違いだったかな……）

現に三日以上歩いているが、町はおろか人っ子一人いない。

そしてそんなことを考えていたら、彼女の頭が急にグラツと傾き、そのまま荒野の硬い地面に倒れこんだ。体がピクリとも動かない。

（あー……もうここで死ぬの……かな？）

そんな彼女が最後に見た光景は、地平線の彼方から、なにかがこちらの方に向かってくるものだった。

「あー暑いー、くっそなんでこんなに暑いんだよ……」

ブルブルと辺りにけたたましいエンジン音を響かせ、ゴツゴツとした荒野の表面を走行している軍用車の助手席に頂垂れているサ

クラがそう言う。

本日どころか年中晴天な荒野に、カラスとサクラが入ったのは一日前。お巡りさんの前では決して言えない速度で現在走行しているため、天井のないオープンタイプのカラスの車には、そこそこ心地のよい風が入ってくるのだが、空から照らされる強烈な太陽光のため、最初は隣りで運転しているカラスに「人間の干からびた死骸は？」や「盗賊はいつでてくるんだ？」と不謹慎な話題を振っていた彼女だが、それは一日目の事、二日目の今日になるとバテテ、話す内容もつばら暑い、飯、寝る関係の事しか話さなくなっている。

「俺達なんかまだましな方だ。俺たちの来る三日前に出た奴なんか、徒歩だつていう話だからな」

「本当かよ！そいつ絶対馬鹿だな。んでもって今頃山賊が何かに襲われて死んでるぜ」

「確かにそうかもな」と言い彼は、近くに置いてある自分の水筒の口に口を付ける。氷属性の魔力が付与されているこの水筒は、魔力付与が解除されるまで、まるで解けたばかりの氷を飲んでいるかのように冷たい。さらにこの中に水を入れれば、どんなに熱い熱湯だろうが一瞬で脳に染み渡るくらい冷たくできる。こういった特定の地域でしか発揮されないが、案外儲かる商売は色々あり、他にもこの能力に特定の味をつけたり、幻影の魔法を利用し、飲んだ瞬間海にいるようなイメージをさせたりすることもできる。

「ふう……」、水を飲みカラスが一息つく、冷たい水が一時の清涼感を体全体に巡せる。そしてそれと同時に体中から汗がにじみ出てくる。顔の汗を裾で拭うと横から手が出てきた。

「よこせ……」

出てきて手はサクラの手で、その顔は、まるで獲物を狙う獣のよう。しかしその体はぐつたりとシートにもたれている。

「今日の分はどうした？」

「もう飲んじまったよ！悪いか！」

ぐつたりしていたと思ったら、今度は立ち上がり、カラスの水筒

を奪おうと立ち上がった。暑いと人種関係なく怒りやすくなるんだと改めてカラスは思い、また一口口に含んだ。

「クアーー！！ムカツク！人が暑くて死にそうなのに、涼しい顔して冷たい物飲みやがってっ……てっうわっ！」

カラスがなにかを見つけたのか急に曲がったため、サクラは遠心力で、車から到底お巡りさんには言えないスピードのまま振り落とされ、荒野に叩きつけられた。

「イってーじゃねえか！水くらい分けてくれたって……ん？」

サクラが異変に気付いた。サクラを振り落とした張本人であるカラスは、車から降り、荒野に俯きで倒れている人間に必死に話しかけている。

「おい！大丈夫か？おい！」

体を揺さぶっても、話しかけても返事がない。首元に手を当てて脈を測る。

「おいそんな奴ほっとこうぜ」

サクラがカラスの隣りに立ち、そう言った。

「そういう訳にはいかない。一応まだ生きてる」

「ハア……、勝手にしろ」

そういうものの、サクラは車のトランクから毛布と水とタオルを取り出し、カラスに渡す。それを受け取るとカラスは一旦仰向けにし、倒れている人間が着ている長袖の白い服を脱がす。

「女か？」

女の一人旅は珍しいため驚いたが、それも一瞬。すぐさま下の長袖のボタンも外し、ズボンのベルトも緩める。そして全身に水で濡らしたタオルを当て、毛布をくるくると簡単に丸め、それを頭に敷き、体を横にして寝かせる。

「あとは日陰でもあればいいんだが……」

「おい、勝手にテント改造させてもらったぞ」

カラスがサクラの方に振り向くと、テントの布を引きちぎって、骨を刺しただけの簡単な日よけを手にとっていた。

「（形はあまり良くないが、一人十分に入れるだけの大きさはあるな……）よし、それをここに設置してくれ」

「ん……あれ……ここは？」

目を開けるといつの間にか夜になっており、頭には毛布が、体にはタオルが置かれており、そして服ははだけていた。

「なんで？」

「やっと起きたか」

少女が起き上がると、そこには釜戸で料理をしているカラスがいた。恐らくシチューだろう。鼻をすんすん鳴らした少女がそう思ったと同時に、彼女の腹の虫がなった。

「あなたは誰？」

「それよりもまず飯だ。どうせ今言ったて頭に入らないだろう？おいサクラ！飯だ！」

カラスがそういうと少し離れた車の方から、人影がむくりと起き上がるのが見えた。垂れた耳にしなびた尻尾。東洋で作られたとされる特殊な桜色の防具着物を身に纏い、目をこすりながら、その人影はこちらにやってきた。

「やーと飯ができたか……」

「ほら寝ようとしな。しっかり座って食え」

そう言うとかラスは、釜戸の前で寝ようとするサクラを座らせ、彼女に他の皿よりも大きな皿に盛られたシチューを渡した。

「ん？んん？んううおおおおおお！」

サクラは皿を渡された瞬間大声を上げた。そしてシチューをスプーンを使わずに一気に飲み干した。

「……」

少女はその姿に言葉がでないくらい驚いた。カラスはそんなことは気にしてないのか、サクラの分のシチューを入れた皿よりも、少

し小さな皿にまたシチューを入れた。

「ほら」

「あつ、ありがとうございます……」

差し出されたシチューを少女は一礼して受け取る。そこにはちゃんとスプーンが付いていた。

「こいつの事は別に気にしなくてもいい。いつもの事だからな。それえよりも……」

「おかわり！」

「はいはい……」

今度は、サクラから差し出された皿にシチューを入れながら、カラスが喋り出す。

「名前は？」

「スノウです。今回は食料が尽きて倒れていたところを助けていただいてありがとうございます」

「こんなところで食料が尽きるなんてな……、盗賊にでも襲われたのか？」

「情けないですね。あるとき無理やりにも奪い返しておけばよかったです」

「まあ命あつての物種だ。下手に取り返そうとすれば、殺されていたか、そうでなくても……」

「おかわり！」

「……自分でよそれ」

カラスは、自分が持っているお玉をサクラに渡した。サクラはお玉の主導権がこちらに渡った瞬間、大喜びし、それですくっては飲み、すくっては飲みとスプーン要らずの食事を再開した。

「どうしてこんな所に？ここは女が一人で旅するところじゃないだろ？」

「特に理由はありません。あてもないその日暮らしの旅人ですから、偶然ここを通っただけです。それと……」

「それと？」

次の瞬間カラスの目の前に白い巨人の腕が突き出されていた。いや、正確には、それはスノウが自らの魔力を使い出したものであり、腕の動きはもちろん指の細かな動きもスノウの腕や手とリンクしていた。

「ぼくはただの女の子ではありませんよ。その気になれば盗賊を簡単に追っ払うこともできましたし」

「へえ……、これは驚いたね。これに似た魔法は結構見てきたけど、その中でもこれは中々……」

「まだまだこんなものじゃありませんけどね。これがぼくの魔法スノウハンドです」

「おいカラス。シチューがもうないぞ」

「……」

「いった！痛い痛い！何すんだこの馬鹿！」

カラスは立ち上がり、グーの形にした拳をこめかみに当てると、思い切りグリグリと通称グリグリを始めた。

サクラはカラスによるグリグリ攻撃から逃れようと身をねじったり、こめかみに当てられている手を外そうとするが、ものすごい力で抑えられており、中々外れない。

「お前はなんでいつもそうなんだ？依頼は勝手に受けてくるし、食ったものは片づけない、掃除洗濯はすべて俺任せ、拳句の果てに飯を全部食う！」

「うわー、カラスが怒ったー！」

「ふっふふ、あはっ、あはははは！」

カラス屋少女と会う 二（前書き）

書き途中です

カラス屋少女と会う 二

サクラがカラスの説教から逃れられたのは、それから数十分後の事で、その間にカラスはサクラの普段の態度から私生活の事、さらにはサクラ自身には全く関係のないことまで言われ注意され、一方サクラは十分くらい抵抗したり、逆切れなどをしていたが、最終的にはグリグリの痛みに涙を流しながらカラスの説教を聞くだけで、その間スノウは何が面白いのか腹を抱えて笑い転げているだけだった。

そしてサクラはカラスの説教が終わると、カラスの頭を一発引つ叩いて車の助手席に戻り、毛布にくるまり、大きな寝息を立て始めた。

「すまなかった」

「いや大丈夫ですよ面白かったですし。でもご飯が無くなっちゃいましたけど？」

食べ終えたシチューの代わりに渡されたインスタントコーヒーを意味もなくかき混ぜながら、スノウがそういうとカラスは「心配ない」と言い、車の方へゆつくりと向って言った。

車の方に無事サクラにバレずたどりつけたカラスはそつとトランクを開ける。その中から、新聞紙に包まれた長方形の物体と、酒瓶を取り出すとさつさと釜戸の方に戻り、新しい薪をくべ始めた。

「それは何ですか？」

「これか？これは甘蛇の燻製と、フルーツリーのエキスを集め発酵させた酒だ」

新聞紙を開けると、そこに串に巻かれ、燻製にされた甘蛇の姿があった。

「……それ食べれるんですか？」

スノウがあまりのグロテスクな外見をしている甘蛇の燻製を、にやけ面で見ているカラスに少し引き気味にそう言った。

「最初はだれだってそういうんだよな。確かに見た目はグロテスクだが、味は流石『甘』蛇。ジャングルの奥地で甘いフルーツを食べているから独特の甘さがあって、本来は刺身にして生で食うのが美味いが、だがそれだと色んな菌を含んでいて腹を壊すからこうやって燻製にしたり、焼いてして食べるのが一般的だな。まあそれでもあえて生にこだわる奴もいて……」

「はあ……」

「そしてこれに合うのがこのフルーツリーフ酒。甘蛇が生息しているジャングルでしか育たない希少な葉っぱ『フルーツリーフ』を、特殊な製法で発酵させた酒だ」

ポンツと酒瓶に付いているコルクを歯で噛み、顎の力だけで引き抜くとそのままグラスに注がず、勢いよくラツパ飲みした。

「くはあ！」

おやじ臭い息を吐き、カラスは甘蛇の燻製を釜戸の火の近くに刺した。

「ふう……、さてと、自己紹介がまだだったな。俺の名前はカラス。依頼屋の所長を務めている。今回ここに来たのは、この先の町のラムの町周辺で巨大なバグが多数発見され、その駆除の依頼をあの馬鹿がとってきたからだ」

「依頼屋さんでしたか……、全然そうは見えませんか。荷物も武器も軽いですし、ぼくと同じ旅人かと思いましたよ」

「まあ実際そう見えるのもしかたないな。でも案外しっかり持ってるもんだ」

そろそろかとぼつりと言いカラスは甘蛇の燻製を取る。ちょうど良く火に炙られた燻製はとてもいい匂いを振りまき、カラスの何も入っていない胃袋を刺激する。しかしカラスはそれをすぐに口に運ぼうとはせず、串の部分をクルクル回し、なにか考え事をしているようだ。

「なあ……」

「なんでしようか？」

「スノウとか言ったな。あんた金は持っているか？」

「鞆にいれていましたから、盗賊達に持ってかれてしまいました。もちろん通帳も印鑑も。まっ、どのみち次の町に付いたら適当に働く予定でしたから」

「へえ、そうなのか。ちなみに基本的には何をして稼いでいるんだ？」

「だいたい依頼屋のまねごとですね。こう見えて結構荒事とか慣れていますから」

「そうか……」

「そこまで言うとかラスは甘蛇にかぶりつき、酒をラツパ飲みした「それだったら、俺たちと一緒に依頼をやってみないか？」

「え？」

スノウが目を丸くする。

「いや、いやただたら別にかまわない。だけど俺たちが次に行く町は、基本的に平和そのものだし、今回の依頼だって町長直々の依頼だからな」

「えっ？それって……」

「そっ、依頼書を受け持つ事務所どころか、依頼屋すらない正真正銘の平和な町なんだ」

「嘘」

依頼屋がない町。様々なバクの事件があり、数々の賞金首がいるこの世界では大変珍しい町だ。

「でも依頼屋って普通はそういうの嫌いなんじゃないんですか？
その……、自分の仲間たち以外と仕事をするっていうのは」

依頼屋というのは自分の仲間もしくはチーム以外との仕事を嫌う。理由は取り分が無くなるし、基本的に人をあまり信じない輩が多いからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343/>

カラス屋

2011年10月7日00時29分発行